

## パリ古地図のサン・ドニ通り —— 1517年パリ入市式とパリ案内の書『古代の華』 ——

平手友彦

### 1 はじめに

パリに住むあるブルジョワが1517年5月12日の日記に「フランス王妃でありブルターニュ公妃のクロード妃がパリに入市され、それは見事であった。」と書き留めている<sup>1)</sup>。クロード妃ことクロード・ド・フランスは、フランス国王ルイ十二世とブルターニュ女公アンヌ・ド・ブルターニュとの間に生まれた長女で、母アンヌが亡くなるとブルターニュの継承権を得てブルターニュ女公となり、後にルイ十二世から王位を継ぐフランソワ一世と1514年5月15日に結婚する。ルイ十二世が亡くなると、フランソワ一世は1515年1月25日にランスで戴冠式を行って王位に就くが、クロード妃は結婚してから三年目にしてようやくフランス王妃としてパリに入市する。国王フランソワ一世不在の中、5月10日にパリ郊外のサン・ドニ聖堂で戴冠式を終えたクロード妃は、二日後、王侯貴族とパリ市のお歴々に随行されて盛大な入市式を執り行った。

中世の時代から王国内を巡行した王と王妃が都市に入る際には入市式を行う習わしがあった。パリ入市式は文献で確認できる十四世紀中頃から行程がほぼ決まっており、北のサン・ドニ門から市中に入ると、サン・ドニ通りを、ポンソーの泉、トリニテ、絵師たちの門、聖イノサン、シャトレへと南に進み、セヌ河を両替橋で渡ると、ノートル＝ダム大聖堂を經由して王宮に到着する。これらの要所では入市する王あるいは王妃を讃える活人画聖史劇が行われた。入市式には、自らの権力を示して都市をコントロールしようとする王権と、構成員の序列を確認して表象する都市との緊張関係を見ることができるが<sup>2)</sup>、詩人や劇作者が入市式の担い手となればそこに文学的な意味が生まれるだろう。1517年のクロード王妃のパリ入市式では、当代の詩人ピエール・グランゴール Pierre Gringore がパリの「宣誓大工頭」のジャン・マルシャン Jean Marchand と協力して舞台を組んだ。

クロード王妃とともに王侯貴族とパリのお歴々が練り歩いたサン・ドニ通りは、当時パリ右岸を南北に突き抜けるサン・マルタン通りと並ぶ目抜き通りで、「サン・ドニ大通り」と呼ばれていた。この通りで行われた入市式ではどのような活人画聖史劇が披露されたのだろうか。しかしその前に、そもそもこのサン・ドニ大通りはどのような通りだったのだろうか。本論では、まず16世紀パリの地図について検討し、次に、古の「パリ案内の書」として知られる『古代の華』を手がかりとして、パリ入市式が繰り広げられたサン・ドニ大通りを立体的に浮かび上がらせてみたい。

## 2 16世紀パリを描く地図

16世紀パリの地図は、現在のミッシュランの地図のように記号化されたものではなく、城壁と城門で囲まれた都市全体を俯瞰し、通りや建物が具体的に描き込まれた絵図になっている。16世紀には数多くの地図が作られたが、それ以前に都市全体を描いたパリ地図は存在しないと言われている<sup>3)</sup>。

1495年のフォルノーヴォの戦いでフランス王シャルル八世に勝利するマントヴァ侯フランチェスコ二世ゴンザーガは、自らのゴンザーガ城の「都市の間」を諸都市のフレスコ画で飾ろうとするがパリの地図が見つからない。そこで侯妃イザベラ・デステに仕える若きユニストで占星学者のパリーデ・ダ・チェレザーラ Paride da Ceresara にパリの地図を探すよう命じる。パリーデが持参したパリ地図は、他の都市の木版画地図とともに綴じ込まれた一冊の本であった。それは1493年にハルトマン・シェーデルがニュルンベルグで出した『年代記』（いわゆる『ニュルンベルグ年代記』）であったと思われるが、後述するようにこれはパリを描いたものではない。マントヴァ侯はその後八方手を尽くすがパリの地図は手に入らない。それは無理もない話で、中世の写本ではパリは細密画で描かれていたもの<sup>4)</sup>、既に都市地図を持っていたイタリアやドイツとは違ってパリの地図はまだ作られていなかったからである<sup>5)</sup>。

地図はそれが表す都市の年代と作図時期が異なる場合が多い。また印刷の場合は現存するものが必ずしも初版であるとも限らず、作図と印刷の時期が異なる場合もある。本章ではブチエとデランの論考を参考にしながら現存する16世紀パリ地図を製作時期の順に辿っていく<sup>6)</sup>。

### A ハルトマン・シェーデル Hartmann Schedel 『年代記』 *Liber cronicarum*、「パリ」 Parisius (1493年 木版画 19.5×22.8cm) (地図 A<sup>7)</sup>)

上述したように、ニュルンベルグのアントン・コーベルガー Anton Koberger が出したものである。ここで使われたパリの図は、イタリアのトレヴィーゾやドイツのマグデブルクを描く際に用いた木版を使い回した、いわば贋作「パリ図」である。『年代記』は当時大ヒットしたようで、ブチエの調査によるとラテン語初版だけでも800点確認されており、そのうち120点がフランスに現存する<sup>8)</sup>。



地図 A 『年代記』

B ピエール・グランゴール Pierre Gringore 『キリスト教の街の嘆き』 *La complainte de la cite crestienne* (1530年頃 木版画 6.7×8 cm) (地図 B<sup>9)</sup>)

1517年の入市式を担ったグランゴールがパリを離れ、ロレーヌ公の元で綴ったキリスト教擁護の詩である。『エレミヤの哀歌』をもじって、イスラム勢力によってキリスト教の街が蝕まれることを嘆く。表紙扉の木版画はブチエによればパリを「リアル」に描いた最初のものである<sup>10)</sup>。城壁外北から右岸、シテ島、左岸と見渡した図で、ノートル＝ダム大聖堂やネールの塔なども見える。手前の四つの城門は、左からテンプル門、サン・マルタン門、サン・ドニ門、モンマルトル門であろう。入市式でクロード王妃が入城したサン・ドニ門はひととき大きく描かれている。



地図 B 『キリスト教の街の嘆き』

「リアル」とはいえ、この地図と上記 A のシューデル『年代記』は、部分図であるから以下のパリ全図と同列に置くことはできない。

C 「グランド・グアッシュ」 Grande gouache (1540年頃 彩色グアッシュ 9枚 442×514cm) (地図 C<sup>11)</sup>)

1871年のパリ市庁舎の火災によって焼失するが、その直前に36枚の写真に取られ、今はパリ市歴史図書館にある。長らく H「タペストリーの地図」のコピーと考えられてきたが、デュモランの研究以降、「グランド・グアッシュ」は1523年から1530年頃に製作されたオリジナル「原型パリ地図」から作られたと考えられるようになった。後述する地図の多くは同時代のパリの变化に合わせた修正（「近代化」modernisation）が加えられているが、この「グランド・グアッシュ」には「描き直し」repeintはあるものの「近代化」が少ないことから「原型パリ地図」に近い姿を留めていると考えられる<sup>12)</sup>。



地図 C 「グランド・グアッシュ」

地図は現在のパリと異なり、上が東で左が北、中央にセーヌ川が上（東）から流れる形を取っている。「原型パリ地図」から生まれた地図だけでなく、16世紀のパリ地図はごく一部の例外を除いてことごとくこの形を取る。地図上部には二つの紋章（フランス王国とパリ市）がある。左下の紋章はモンミライユ家の紋章で、1540年から41年にかけてパリ市長を務めたエチエン

ヌ・ド・モンミライユ Etienne de Montmirail を表し、この人物が「グランド・グアッシュ」を注文したと考えられている。右下の紋章は、デュモランによると、フランソワ・ド・ノアイユ François de Noailles とその妻ローズ・ド・ロックロール Rose de Roquelaure で、17世紀には彼らがこの「グランド・グアッシュ」を所有していたことを示す<sup>13)</sup>。

「グランド・グアッシュ」の「カルトウーシュ」cartouche（余白の囲み）には「国王様から私どもが授かった允許と許可によって」という一文があるが、これは王が地図作成を命じたのではなく、文字通り地図の印刷と出版を許可したものと解釈すべきとされる<sup>14)</sup>。

D セバスチャン・ミュンスター Sébastien Münster 『コスモグラフィア』 *Cosmographie*、「パリジイ族の都ルテシア」Lutetia Parisiorum urbs (1550年 木版画 6.7×8 cm) (地図 D<sup>15)</sup>)

初版はラテン語で、ドイツ語版、フランス語版、イタリア語版に同じ地図が使われている<sup>16)</sup>。ボナルドとフランクランの分析では1530年頃のパリを描いているこの地図もやはり「原型パリ地図」から作られたと考えられる。C「グランド・グアッシュ」が焼失した後はパリ市全体を描いた現存する最古の地図になる。



地図 D 「コスモグラフィア」

E 「バーゼルの地図」 plan de Bâle、「パリのラ・ヴィル、シテ、ユニヴェルシテ」La Ville. Cité. Université de Paris (1553年頃 彩色木版画 8枚 96×133cm) (地図 E<sup>17)</sup>)

1874年にバーゼル図書館司書ルイ・シエーバー Louis Sieber によって発見された。地図は1661年にバーゼル大学が購入したバーゼルの名家アーメルバッハの蔵書に入っていた<sup>18)</sup>。パリのモントルグイユ街のジェルマン・オヨ Germain Hoyau とオリビエ・トルッシュ Olivier Truschet によって製作されたことが地図右下のカルトウーシュに読むことができる<sup>19)</sup>。この地図は次



地図 E 「バーゼルの地図」

のF「サン・ヴィクトールの地図」とよく似ており、その関連性が指摘されてきたが、何れも「原型パリ地図」から作られたと考えられる。

当時のパリは地図のタイトルにもあるように、王宮とノートル＝ダム大聖堂のある行政の中心のシテ島「シテ」Cité、右岸の商業地区「ラ・ヴィル」La Ville、そして大学と学寮が集中する「ユニヴェルシテ」Universitéの三つの地区に分けられていた。カルトゥーシュには、パリの287の通り、104の教会と修道院、49の学寮すべてがこの地図に描かれていると説明されている。1533年7月に改築が始まった新パリ市庁舎の姿が反映されているのは本論で取り上げる地図の中ではこの「バーゼルの地図」のみである。

左下のカルトゥーシュには「パリ賞賛の詩」が掲げられ、その作者名は「折り句」で「ジル・コロゼ」Gilles Corrozetと読むことができる。このジル・コロゼが後述するパリ案内の書『古代の華』を1532年に上梓する。

F 「サン・ヴィクトールの地図」 plan de Saint Victor、「パリのヴィル、シテ、ユニヴェルシテ」La Ville. Cité. Université de Paris (1552年頃 銅版画 67×80.5 cm) (地図F<sup>20)</sup>)

1550年当時のパリの変化に敏感で、城壁外のフォーブールの拡大、テンプルやサン・ジュヌビエーヴ境界の変化などを知ることができる。1552年に作られたバスターユの前方稜堡が描かれていない一方、1547年にできたサン・ミッシェル橋とアルスナルや1550年に通ったメール門とフォアンの港が描かれているところから、この地図の制作年は1550年から1552年と考えられる<sup>21)</sup>。E「バーゼルの地図」と極めてよく似ているが、デランによるとこの地図は「バーゼルの地図」が基にした（「原型パリ地図」から作られた）原画に修正を加えたもののコピーである<sup>22)</sup>。



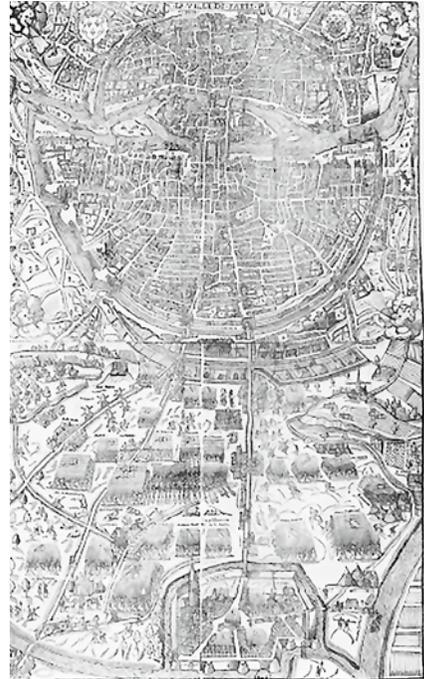
地図F「サン・ヴィクトールの地図」

この地図は版画家ピエール・エクリッシュ Pierre Eskrich によって一回り小さい銅版画(40.7×53.8cm)に再現され、フランソワ・ド・ベルフォレ François de Belleforet が1575年に『コスモグラフィ』 *La Cosmographie universelle de tout le monde* の第一巻に入れた。

G アンドレ・テヴェ André Thevet 「パリのラ・ヴィル、シテ、ユニヴェルシテ、そして二つの軍の戦場」 Le portrait de la ville de Paris, cité & université, avec le plan du camp des deux armées (1568年 木版画 66.8×41.2cm) (地図 G<sup>23</sup>)

サン・ジャック通りのマチューラン・ブレイユ Mathurin Breuille 工房から上梓された2枚つなぎ合わせの地図である。パリ北部のサン・ドニまでを射程に入れ、1567年11月10日のモンモランシー軍(国王軍)とコリーニ提督・コンデ公の連合軍(新教派)による「サン・ドニの戦い」を描く。この戦いで国王軍は勝利するが、司令官アンヌ・ド・モンモランシー元帥は致命傷を負って亡くなる。

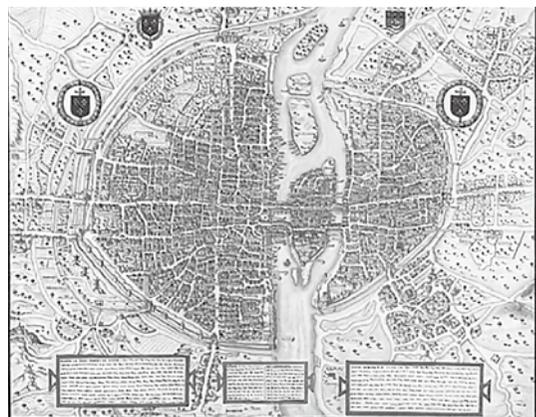
興味深いのは、これまでの地図と異なって地図の上が南で上部にパリ、下に北のサン・ドニの街を置いてその間に戦場を描く。従ってセヌ川は左から右に流れ、現在のパリの地図とは配置が逆転し、16世紀の地図としても例外的な構図となる。これは、「サン・ドニの戦い」を描きたいがためであろうが、どうして上を北に、つまりサン・ドニが上に位置する地図とならなかったのであろうか。理由はよく分からないが、これまでの上が東の地図を時計回りと反対に45度動かす方が考え易かったのだろうか。



地図 G 「パリのラ・ヴィル、シテ、ユニヴェルシテ、そして二つの軍の戦場」

H 「タペストリーの地図」 Plan dit de la tapisserie (1570年頃 タペストリー 約420×500cm) (地図 H<sup>24</sup>)

フランス革命期に紛失するが、1688年頃に水彩で複製されたものが残されている<sup>25</sup>。遅くとも1570年代には製作されていたと考えられるが、パリ市庁舎が古い柱立ての姿のままとなっており、城壁と城門の様子からこの「タペストリーの地図」の原画の成立は1530年代後半に遡る。通り名や大建造物が「吹き出し」banderoleで示され、これがC「グランド・グアッシュ」と



地図 H 「タペストリーの地図」

ほぼ同じ位置にあることから、二つの地図が参照した地図には既に「吹き出し」が記載されていたと推測できる<sup>26)</sup>。

フランス革命直前の『ジュルナル・ド・パリ』*Journal de Paris* 1788年5月28日に掲載されたある手紙によると、「タペストリーの地図」は毎年聖体の祝日から次の日曜日昼までパリ市庁舎のファサードに飾られていた<sup>27)</sup>。

I ジョルジュ・ブラウン Georg Braun 『世界の都市劇場』*Civitates Orbis Terrarum*、「リュテシア、いわゆるパリ」*Lutetia, vulgari nomine Paris*（「三人の人物がいるブラウンの地図」*plan de Braun, plan aux trois personnages*）（1572年 銅版画 34×48.3 cm）（地図 I<sup>28)</sup>）

ケルンで1572年にラテン語初版が出た後、ドイツ語版（初版1574年）とフランス語版（初版はおそらく1575年）が立て続けに出版される。左下に1560年から70年当時の服装をしたひとりの紳士と二人の淑女が描かれていることから「三人の人物がいるブラウンの地図」と呼ばれる<sup>29)</sup>。ミュンスターの『コスモグラフィア』とよく似ており、デザインの時期は城壁や城門の様子から1530年頃と推測でき



地図 I 「三人の人物がいるブラウンの地図」

る。しかし、『コスモグラフィア』よりも、通り、城壁、城門、主たる建物の位置が正確であることから、ポナルドはこの地図のデザインは実測して製作された可能性があるとしている<sup>30)</sup>。この地図もやはり1523年から1530年の「原型パリ地図」から生まれたものと考えられるが、印刷された時期が遅いにも関わらず比較的古いパリの姿を留めている。

### 3 16世紀パリ地図の系譜

「グランド・グアッシュ」で見たようにデモランの研究以降は上述した地図の多くが1523年から1530年頃の「原型パリ地図」を基に製作されたと考えられるようになった<sup>31)</sup>。それらの地図は、C「グランド・グアッシュ」、D ミュンスター『コスモグラフィア』、E「バーゼルの地図」、F「サン・ヴィクトールの地図」、H「タペストリーの地図」、I「三人の人物がいるブラウンの地図」の六点である。デランはこれら六点の地図の「近代化」を比較分析して次の結論に至る<sup>32)</sup>。

「原型パリ地図」はおそらく4×6mの大判の手書き地図で、1520年から1530年にかけて製作された。この「原型パリ地図」から「近代化」を受けた新たな地図が生まれる。大判では

1535年頃にC「グランド・グアッシュ」とH「タペストリーの地図」の原本（現存せず）が作られ、後者は1570年頃完成する。他方で、1530年頃に作られた「原型パリ地図」の（縮小）印刷版（現存せず）からは1550年頃にD ミュンスター『コスモグラフィア』と1572年にI「三人の人物がいるブラウンの地図」が生まれる。また、「原型パリ地図」からもう一つの（縮小）印刷版（こちらも現存せず）が1550年頃に作られると、ここからは直ぐにE「バーゼルの地図」（1550年頃）とF「サン・ヴィクトールの地図」（1551年頃）が作られた。デュモランは「バーゼルの地図」は「サン・ヴィクトールの地図」の「凡庸」*médiocrité* なコピーであるとするが、これに対してデランは「バーゼルの地図」を高く評価する。デランによれば、「グランド・グアッシュ」は写真のみで残り、「サン・ヴィクトールの地図」と「三人の人物がいるブラウンの地図」の製作は1550年以降、「タペストリーの地図」もその後の製作であるから何れも時期としては遅く、後者はそもそも複写しか残されていない。また、ミュンスター『コスモグラフィア』は同じ1550年頃に作られているものの、その出来は不十分であるから、「バーゼルの地図」が現存する最古のパリの地図であると結論付ける。

確かにデランの分析は緻密で説得力もあり、「バーゼルの地図」が「現存する最古のパリの地図」といえるが、他の地図の価値がそれで劣るといえることにはならない。「グランド・グアッシュ」は1523年から1530年頃に製作されたオリジナル「原型パリ地図」に最も近い姿を留めている。写真であるからオリジナルの地図ではないが、描かれたパリは「バーゼルの地図」よりも遡ることができて資料価値は高い。また、「三人の人物がいるブラウンの地図」も製作は1550年以降と遅いものの、地図を見れば一目瞭然でフィリップ・オーギュストの城壁を確認することができる。同じく資料としての価値は低くはない。

#### 4 ジル・コロゼの『古代の華』

ジル・コロゼ Gilles Corrozet は1510年7月4日パリ生まれの出版書籍業者である<sup>33)</sup>。1536年からシテ島王宮の大広間に店を構え、1555年には書籍商史となる。大学教育を受けることなくこの世界に入ったコロゼは、ラテン語、イタリア語、スペイン語を独学で修め、それらの翻訳をみずから出版した。『古代の華』のようなパリ案内書を出すことができたのは、これらの外国語を習得していたことが大きい。当時パリを旅行するものは、ドイツ人よりもスペイン人とイタリア人が多く、パリ案内にはイタリア語とスペイン語が話せることが求められた。加えてラテン語を話すことができれば、ドイツ人、ポーランド人、オランダ人とも意思疎通ができる。コロゼはこの三言語に早くから馴染んでいたらしい。外国人が好む金言、箴言、寸句などを自らの詩句の中に取り込んでいるのは、彼の店に外国人が多く訪れていた証拠ともいえる。

『古代の華』 *La fleur des antiquitez* は、「パリ市の歴史」、「トロイのヘクトールからフラン

ソワ一世までのフランス国王系図]、「街路リスト」、「教会リスト」、「学寮リスト」から成り、1532年の初版からよく売れたらしい<sup>34)</sup>。分かっているだけでも1532年に二版、1533年に二版、そして1534年にも二版出て、1535年、1539年で加筆修正され、1543年には大きく増補される(図1)<sup>35)</sup>。コロゼは1550年に『古代の華』の改訂版として『パリの古代、歴史、逸話』*Les Antiquitez, histoire et singularitez de Paris*を出版し、これが前著に劣らず売れて、こちらも1554年、1555年、1557年と1558年に版を重ね、1561年にはボンフォン親子 Nicolas et Pierre Bonfons によって更に増補され、世紀をまたがって1612年のデュ・ブリユル Jacques Du Breul による『パリの古代の劇場』*Théâtre des Antiquités de Paris*に繋がる。『古代の華』から『パリの古代、歴史、逸話』、そして『パリの古代の劇場』は、ほぼ1世紀の間、少しずつ形を変えながらパリを紹介してきたことになる。

1543年版『古代の華』は、それまでの版とは違って、「街路リスト」にはそれぞれの通りの始まりと終わりが明記され、これまで別立てになっていた「教会リスト」の教会と「学寮リスト」の学寮がこの「街路リスト」の中に溶かし込まれている。また、リストそのものが改められただけでなく、この1543年版には「街路リスト」の他に、「パリ市の一日の食料消費」、「パリ市民ひとりあたりの一日と年間の食料消費量」、「ノートル＝ダム大聖堂の大きさ」なども加えられ、まさにパリ案内の書の様相を呈する。愛書家ジャコブが指摘するように、パリを知らない者が案内もなく一人でパリに来た時には大いに役立ったはずであり、当時のパリのトポグラフィを知る上で極めて貴重である<sup>36)</sup>。

上述したように「バーゼルの地図」のカルトゥーシュには「ジル・コロゼ」の名前が入っており、「バーゼルの地図」とこの『古代の華』の関係は興味深い。しかし、『古代の華』の「パリ市の歴史」、「トロイのヘクトールからフランソワ一世までのフランス国王系図」、そして「街路リスト」はコロゼ自身の手によるものではなく、何れもそれまでに単独に出版されたテキストを借用した可能性が高いことを予め指摘しておかなければならない<sup>37)</sup>。この点も考慮に入れ、1543年版『古代の華』の街路記述を読みながら、「バーゼルの地図」の中のサン・ドニ通りを辿っていこう。

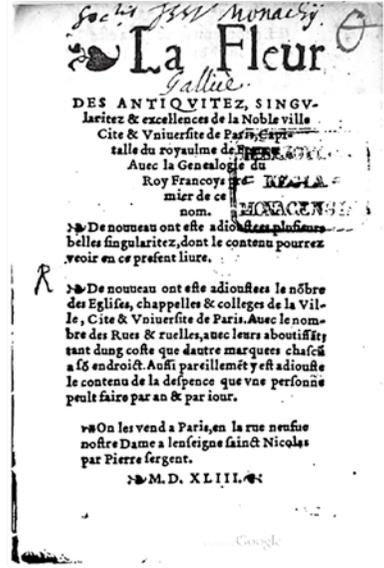


図1 『古代の華』(1543年版)

## 5 地図の中のサン・ドニ通り

1543年版『古代の華』の全体の三分の一以上を占める(75/160ページ)「街路リスト」は四部で構成されている。すなわち、「シテ島」、「左岸ユニヴェルシテ」、「右岸東部(グレーヴ広場、サン・アントワヌ通り、サン・マルタン通りとその周辺)」、「右岸西部(サン・ドニ通り、レ・アール、サン・ジェルマン・ロクセロワとその周辺)」である。サン・ドニ通りの記述は、その東側に平行して南北を通るサン・マルタン通りに繋がる一部を別として、第四部の冒頭に記載されている。

リストはセーヌ川に近いところから始まり、サン・ドニ通りにある教会と礼拝堂が南から順に、「聖オポルチュンヌ教会」、「聖カトリヌ教会と病院」、「聖イノサン教会と墓地」、「セピュルクル教会」、「聖マグロワ教会と修道院」、「聖ルー・聖ジル教会」、「サン・ジャック教会と病院」、「トリニテ教会」、「聖ソヴァー教会」、「フィーユ・ディユ礼拝堂」と、名前が列挙される。ここで注目すべきは、最後の「フィーユ・ディユ礼拝堂」に「ここでは修道女が罪人に、十字架への口づけと聖水、パンとワインを与え、吊し首になる罪人はこのパンを三切れ食べる」と説明が加えられていることである<sup>38)</sup>。このような機能説明は他の教会には付けられていない。これは今後のバリ案内の書の方向性を示唆しており、1543年版『古代の華』のガイドブック的特徴の一つともいえる。

続いて、サン・ドニ通りに繋がる通りをやはり南から順に列挙して、それぞれの通りの一方がサン・ドニ通りから始まり、その行き着く先がどの通りであるかを示す。例えば、「プチ・リヨン通り：サン・ドニ通りから始まり二つの門通りへ至る」<sup>39)</sup>(図2)のような示し方である。また、サン・ドニ通りに交わる通りが大通りであった場合は、次にその通りを軸にして他の通りを紹介するという形で展開していく。例えば、「トリュアンドリ通り：サン・ドニ通りから始まりダルトワ伯爵夫人通りへ至る。プトネ通り：トリュアンドリ通りから始まりレ・アールのピロリ(さらし台)へ至る。」<sup>40)</sup>このようにして第四部の街路リストには、サン・ドニ通りから伸びる20本の通りとサン・マルタン通りに繋がる6本の通りの計26本の通りが記されている。「バーゼルの地図」でこれらと同じ名称で記載されている通りは20本である<sup>41)</sup>。残り6本の通りは、スペースの都合か理由はよく分からないが「バーゼルの地図」に名前はいれられていない<sup>42)</sup>。

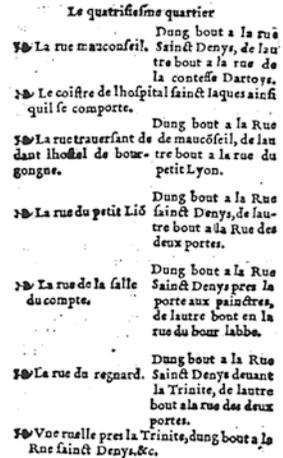


図2 『古代の華』  
(1543年版 fol. lxxiii v)

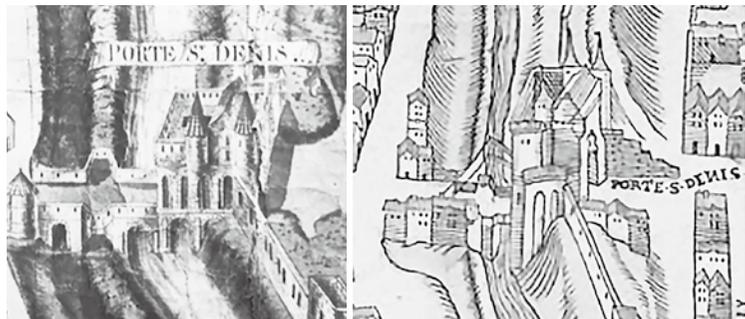
先にも述べたように「街路リスト」は1543年版『古代の華』で通り名に発地と着地が明記されて大幅な改訂を受けるが、1550年版『パリの古代、歴史、逸話』では、「街路リスト」は名称と順序はほぼそのまま引き継がれるものの発地と着地の記載は削除される。コロゼが紙数を減らすためにわざわざ削除したとは考えにくい、仮に「バーゼルの地図」と1550年版『パリの古代、歴史、逸話』を組み合わせる、つまり「バーゼルの地図」（ブチエによれば1553年頃の製作）を横に置いて1550年版『パリの古代、歴史、逸話』を読ませるという意図があったとすれば、通りの発地と着地はなくてもよいという判断があったかもしれない<sup>43)</sup>。

しかし、そのような相互補完関係があったのなら、1543年版『古代の華』までに地図に記載されていない6本の通りの名を「バーゼルの地図」に書き加える、あるいは『パリの古代、歴史、逸話』から削除する整合性があるともいえるだろう。例えば、サン・ドニ通りに繋がる比較的大きく長い通りである「パヴェ通り」や「グラン・ブッシュリ」に近い「セルパン通り」などは、1532年版「街路リスト」にも既に記載されており、「バーゼルの地図」にも読むことができるが、1543年版『古代の華』にも1550年版『パリの古代、歴史、逸話』にも記載されていない。また、1543年版の街路リストは、それぞれの通りの発地と着地が明記されて実用的であるが、パリ中の通りをそれまでの単なる通り名のみ「街路リスト」から発地と着地が明記された実用性に富む「街路リスト」にするには相当の労力がある。これをコロゼ自身が作成したことは疑わしい。なぜなら先述したように、1532年版の「パリ市の歴史」と「街路リスト」は彼自身が作成したテキストではなく、それまでに存在したテキストを流用した可能性が高いからである。であるなら、この1543年版『古代の華』の「街路リスト」も彼の手によるものではないと考えるのが自然であろう<sup>44)</sup>。要するに、「バーゼルの地図」と『パリの古代、歴史、逸話』の相互補完関係を裏付けることにはならない。

## 6 入市式のサン・ドニ通り

1517年の入市式の活人画聖史劇が設けられたサン・ドニ通りを、「原型パリ地図」に最も近い、即ち最も古いパリを描いているとされるC「グランド・グアッシュ」とE「バーゼルの地図」で順に見ていく<sup>45)</sup>。

まず「サン・ドニ門」  
PORTE S. DENIS（地図C・E「サン・ドニ



地図C・E「サン・ドニ門」

門))。パリ市の境界に当たるこの門から王妃一行はパリ市内に入る。ここでは天上の雲間から黄金の冠をくわえた鳩が現れ、舞台中央のクロード妃役の女性の頭上にその黄金の冠を乗せて天上に昇る。まさに始まりに相応しい目出度い活人画である。

サン・ドニ門そのものの描写は「グランド・グアッシュ」の方が切妻や窓などで細かいが、周辺の家屋の描き方は画一的である。「バーゼルの地図」はやや形式的ではあるが家屋の違いが分かるように描かれている。この家屋の描き方の違いは二つの地図の全体の傾向ともいえる。

続いて王妃一行がサン・ドニ通りを南に進むと、「ポンソーの泉」LE PONCEAUがある(地図C・E「ポンソーの泉」)。地図を見るとサン・ドニ門とポンソーの泉はさほど離れていない



地図C・E「ポンソーの泉」

から5分ほどで到達したであろう。泉を利用した舞台には庭が広がり、フランス王家の象徴である百合が一輪あって、その横には王と王妃の象徴であるサラマンデルとオコジョがいる。そして、百合の傍らにいる女性が持つ黄金の林檎から水が撒かれる。

「グランド・グアッシュ」では単に泉が描かれているだけであるが、「バーゼルの地図」では泉のほとりに舞台のような装置を認めることができる。

次の「トリニテ」LA TRINITEでは、舞台上段の玉座に王と王妃が座り、下段の「憩いの園」と呼ばれる庭の中央に百合が一輪咲き、これを二人の男性が見守る(地図C・E「トリニテ」)。



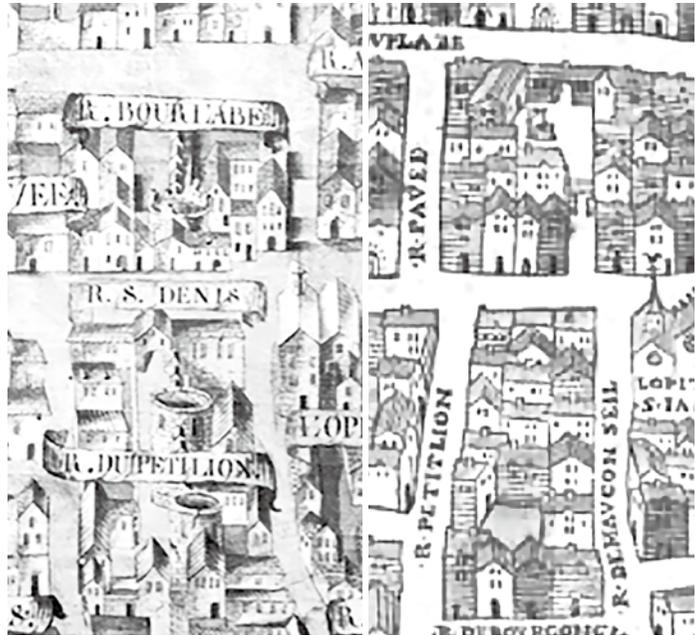
地図C・E「トリニテ」

ここは「受難劇組合」

les Confreres de la Sainte Passion et Resurrection de Nostre Sauveur et Redempteur Jesucrist の縄張りで、「トリニテ」の聖史劇はこの受難劇組合が仕切ることが慣例であった。彼らが聖史劇や笑劇、その練習に使った広さ40m×12mの「講堂」salleがサン・ドニ通りと「ガルヌタル通り」R. DE GARNETALの角のトリニテ病院教会に隣接した二層建物の上階に存

在したが<sup>46)</sup>、「バーゼルの地図」ではこの「講堂」があったとされる建物を教会横に確認することができる。

トリニテから少し移動すると、「絵師たちの門」である(地図C・E「絵師たちの門」)。フィリップ・オーギュストの城壁門跡で、かつてはここがパリの「サン・ドニ門」であった。この舞台の最上部には巨大な金色の太陽があって、その中に白い衣装を着た女性がいる。その下の段には五人の女神がおり、真ん中の女性は



地図C・E「絵師たちの門」

ローマ教皇とフランス王の紋章の入ったエスカッションを持つ。舞台の下部には、教皇、皇帝、王など六名がいる。この舞台とトリニテのそれは、何れもイタリア戦役でのフランスの勝利と平和を示している。

「バーゼルの地図」に城壁の痕跡はないが、「グランド・グアッシュ」には家々を繋ぐ城壁と塔をはっきりと認めることができ、「絵師たちの門」は「R.S.DENIS」の「S.」と「D.」の間に辺りにあったと推測できる。

ここから「聖イノサン」S. INOCENSまで進む(地図C・E「聖イノサン」)。泉のある舞台の上部には巨大なハートがあって、それが三つに別れ、それぞれに「神聖愛」、「自然愛」、「夫婦愛」と名付けられた三人の女が立ち、下段には旧



地図C・E「聖イノサン」

約聖書のダビデ王とアビガエル女王がいる。

舞台には泉があったようだが、二つの地図のサン・ドニ通り沿いにはその泉が見えない。

右岸最後の舞台は「シャトレ」CHATELET 裁判所である（地図C・E「シャトレ」）。この

舞台には巨大な樹木が立てられ、三本の大きな枝が出ている。最上部の枝には冠を被ったフランス王とクロード王妃、真ん中と下の枝にはその他の王と王妃、諸公が取り、「シャトレ」の舞台に組まれた巨大な



地図C・E「シャトレ」

樹木はフランス王家の系図を表していることが分かる。

シャトレの舞台はグランゴールとその協力者である大工ジャン・マルシャンが、入市式の活人画聖史劇を作ったことでフランス財務官から100リーブルの報酬を得た記録が残る場所である<sup>47)</sup>。「グランド・グアッシュ」はちょうど写真の切れ目ということもあってシャトレ裁判所はやや不鮮明であるが、二つの地図の「シャトレ」には門があり、その前に広場が広がっていることが分かる。サン・ドニ通りがセーヌ川にぶつかる「シャトレ」にはかつて「パリの門」Porte de Paris と呼ばれた門があった。地図はおそらくその門を示しているのだろう。河岸まで繋がる広場は巨大なフランス王家の系統樹を掲げるには絶好の場所だったはずだ。

ここからセーヌ河を両替橋で渡ると、「王宮」Le Palais の王門の前に最後の舞台がある（地図C・E「王宮」）。王門は、「バーゼルの地図」で、通りを



地図C・E「王宮」

挟んで「聖バルテレミー」S.BARTELEMI と斜めに向き合う門がそれであろう。門の前で舞台が生まれ、舞台上段には、聖王ルイ九世と母のブランシュ女王、剣を手にした正義の女神の

三人がいる。下段には手紙を手にした冒険家、鋏を持つ作男、要求する物乞いの三人がいて、聖歌隊員が歌う。「シャトレ」でフランス諸王の系図を見た王妃一行は、この王宮に隣接してそびえるサント・シャペルを建立した聖王ルイ九世と再び接して、諸王の中でもとりわけこの王の偉大さを知ることになる。

「バーゼルの地図」では中庭やその「サント・シャペル」S.Chappelleをはっきりと区別して見ることができるが、「グランド・グアッシュ」ではそれぞれの建物が拡大されて描かれている上に、吹き出しの名称が邪魔して、王宮の空間を十分に知ることができない

入市式の最後はノートル＝ダム大聖堂である。ここには舞台はない。大聖堂の前ではパリ大学学長を始め神学部のお歴々、そして大学関係者、教会の司教・司祭の教会関係者が出迎え、代表者が歓迎の辞を述べる。教会の扉が開いて王妃が入ると、パイプオルガンと鐘の音とともに「テ・デウム」が歌われて王妃を迎える。祭壇の周りには数々の聖遺物が並べられ、王妃は跪いてこれらに祈りを捧げる。このノートル＝ダム大聖堂内の儀式が終わると、王妃一行は王宮に入り、締めくくりの晩餐で入市式は終了する。

1517年入市式の活人画聖史劇の要所を二つの地図で見ると、「グランド・グアッシュ」は「吹き出し」が付される重要な建物が拡大して描かれているために「バーゼルの地図」よりも詳細である。他方、通りに並ぶ一般家屋は、「グランド・グアッシュ」では形式的で個性がないが、「バーゼルの地図」は違いが微妙に表現されて想像力を喚起する。また、フィリップ・オーギュストの城壁の痕跡があることから、「グランド・グアッシュ」がより古いパリの姿を留めており、これは「2 16世紀パリを描く地図」で見たとおりである。ただ、リアルという点では、「ボンソーの泉」や「トリニテ」の講堂など、「バーゼルの地図」が優れているところもある。

## 7 終わりに

サン・ドニ通りは大きく変わった。入市式が行われた当時は、『古代の華』の「街路リスト」に記載されたように数多くの教会がこの通りにはあったが、現在のシャトレからサン・ドニ門に残るのは聖ルー・聖ジル教会のみである。18世紀末に「聖イノサン」墓地が隣のレ・アール市場に吸収され、やがてアパレル産業が活気を帯びてくると、この通りの北には娼婦が立ち、南にはボルノショップが増える。名画『あなただけ今晚は』*Irma la douce* のイルマのようにそこに物語があれば魅力的かもしれないが、最近では東洋系も立ってそんな余裕はないようだ。現在のサン・ドニ通りからは、かつてここで王妃の入市式が行われたことなど想像も及ばず、活人画聖史劇の舞台があったことを知る人もいない。しかし、中世の時代から王や王妃がパリに入城するたびに入市式は行われ、このサン・ドニ通りを500年前には王や王妃一行が練り歩

いたのである。

本論では、16世紀パリの地図9点を概観し、「バーゼルの地図」とジル・コロゼのパリ案内の書『古代の華』の関係、そして、「バーゼルの地図」と「グランド・グアッシュ」で1517年のクロード王妃の入市式の実際を見てきた。絵図である16世紀パリの地図からサン・ドニ通りを視覚的に辿り、パリ案内の書と入市式の記述と結びつけることで、王妃の入市式を立体的に浮かび上がらせることができたのではないだろうか。地図を見る限り、河岸まで広がる広場を持つシャトレを除いて、観衆が待ち構える「サン・ドニ大通り」を王妃一行が通った要所での通りの幅は十分ではない。奥行きを十分に取ることができない活人画聖史劇は、自ずから垂直方向に伸びて階層を持ち、そうすることで舞台ではさまざまな仕掛けが可能となったことが分かる。また、『古代の華』は、ヴァリエントを辿ることで、単なるパリ案内書の先駆けという意味にとどまらず、「街路リスト」を巡るテキスト『パリの通りと教会』の問題があることも指摘できた。ピエール・グランゴールはこの1517年以前にも六回の入市式に関わる。その時のサン・ドニ通りにはどのような活人画聖史劇が披露されたのだろうか。これはまた別の機会に論じていきたい<sup>48)</sup>。

## 註

- 1) «Au dict an 1517, douziesme de may, la royne de France, madame Claude, duchesse de Bretagne, fit son entrée en la ville de Paris, qui fut très belle; », *Journal d'un bourgeois de Paris sous le règne de François premier (1515-1536)*, par L. Lalanne, Jules Renouard, 1854, p.56. 日記は続いて随行する王侯の名前を挙げ、一行の服装など細かく触れるが、全体の記述は簡潔である。このクロード王妃入市式は二つの「報告」relationで『フランス儀典』に詳しく報告されている (*Le Cérémonial françois*, par T. Godefroy, t. I, S. et G. Cramoisy, 1649, pp.753-761)。なお、この日記については拙論「フランソワ1世治下のパリのブルジョワ日記 (前)「パヴィアの敗戦」までのニュースあるいは「噂」、『欧米文化研究』第16号、2009年、101-116頁、及び「フランソワ1世治下のパリのブルジョワ日記 (後)「パヴィアの敗戦」からのニュースあるいは「噂」、『欧米文化研究』第17号、2010年、45-61頁を参照。
- 2) 高澤紀恵『近世パリに生きる ソシアビリテと秩序』岩波書店、2008年、32頁。
- 3) J. Boutier, *Les plans de Paris des origines (1493) à la fin du XVIII<sup>e</sup> siècle*, BnF, 2007, p.9. 以下の記述はこれに負う。
- 4) 例えば、ポルシェは『エチエンヌ・シュヴァリエの時禱書』*Les Heures d'Etienne Chevalier* や『大年代記』*Les Grandes Chroniques* のジャン・フーケ Jean Fouquet による細密画のパリの正確な描写を高く評価している (J. Porcher, «Paris dans l'enluminure médiévale», in *BSHPIF*, 87-88, 1960-61, p.74)。
- 5) 実在の地図ではないが、ルグランが再構築を試みた「1380年のパリ」Paris en 1380は14世紀末のパ

- りを再現している (H. Legrand, *Plans de restitution: Paris en 1380*, Imprimerie Impériale, 1868)。
- 6) J. Dérens, «Le Plan de Paris par Truschet et Hoyau, 1550, dit plan de Bâle», in *Cahiers de la Rotonde*, 1986, n.9, pp.17-88; J. Dérens, «Les plans de Paris au XVI<sup>e</sup> siècle», in *Les Plans de Paris du XVI<sup>e</sup> au XVIII<sup>e</sup> siècle. Actes du colloque du 14 juin 1994, Cahiers du CREPIF*, n.50, 1995, pp.17-28; M. Dumolin, «La famille du plan de la Tapisserie», in *Etudes de topographie parisienne*, t.1, Paris, 1929, pp.1-100. 言うまでもなく16世紀パリの地図についてはこの他にも数多くの研究があるが、19世紀以降で特に重要なものとしては A. Bonnardot, *Etudes archéologiques sur les anciens plans de Paris des XVI<sup>e</sup>, XVII<sup>e</sup> et XVIII<sup>e</sup> siècles*, Deflorenne, 1851; A. Franklin, *Etudes historique et topographique sur le plan de Paris de 1540, dit plan de Tapisserie*, A. Aubry, 1869などがある。日本でも、高橋正監修、地図資料編集会編『パリ都市地図集成：Plan de Paris 1530-1808』柏書房、1994年が本稿で扱う地図の多くを掲載している。なお、以下の各地図の製作年の推定はプチエの論考に負うところが多い。
  - 7) A.H. Schedel, *Registrum huius operis libri cronicarum cum figuris et ymaginibus ab inicio mundi* (dit *Liber cronicarum*, ou *Chronique de Nuremberg*), Nuremberg, A. Koberger, 1493, f. XXXiX recto. (Getty Research Institute: [https://archive.org/details/gri\\_33125012232852](https://archive.org/details/gri_33125012232852))
  - 8) Boutier, *op.cit.*, p.75.
  - 9) *La complaincte de la cite crestienne*, P. Bige, vers 1530, f.Aii recto. (BnF Rés.Ye 2947)
  - 10) Boutier, *op.cit.*, p.76.
  - 11) BHVP, RESERVE A 75 c.
  - 12) J. Dérens, «Les plans de Paris au XVI<sup>e</sup> siècle», p.24.
  - 13) M. Dumolin, *op.cit.*, p.57.
  - 14) «par le privilege coge du roy a nous done». 王令による地図の作成が初めて確認できるのは、ルイ十三世がゴンブスト J. Gomboust に命じた1652年の地図である (Boutier, *op.cit.*, pp.42-43)。
  - 15) S. Münster, *La cosmographie universelle*, Bâle, H. Pierre, 1556, pp. 90-91. (BnF C&P, Ge D 22189)
  - 16) この地図はリヨンのバルタザール・アルヌーレ Balthazar Arnoullet が『ヨーロッパ著名有名都市の景観 第一巻』*Premier livre des figures et pourtraitz des villes plus illustres et renommées d'Europe* (1552年)などに「パリ」Parisy (16.4×25.7 cm)として流用し、更にこのアルヌーレ版パリ地図は1567年ヴェネツィアでパオロ・フォルラーニ Paolo Forlani の『世界有名主要都市 第一巻』*Il primo libro della città, et fortezze principali del mondo*の中に銅版画 (18.5×25.5 cm)で再現されて広く知られるようになる。
  - 17) Universitätsbibliothek Basel Kartenslg AA 124 (<http://dx.doi.org/10.3931/e-rara-20453>)
  - 18) 発見の経緯はバーゼルで調査したクザンの論考を参照 (J. Cousin, *Notice sur un plan de Paris du XVI<sup>e</sup> siècle nouvellement découvert à Bâle*, Société de l'histoire de Paris, 1875)。
  - 19) おそらくデザインを担当したのがオヨで印刷はトルッシェと考えられる (J. Dérens, «Le Plan de Paris par Truschet et Hoyau», pp.27-29)。
  - 20) BnF EST, Rés. AA 6 (Androuet du Cerceau) (写真は Boutier, *op.cit.*, p.89)
  - 21) J. Dérens, «Le Plan de Paris par Truschet et Hoyau», p.50.

- 22) *Ibid.*, p.65.
- 23) A.Thevet, Le portrait de la ville de Paris, Cité, & Université, avecq'le plan du camp des deus armees, M. Breuille, 1568. (BnF GE D 27969 これは Saint-Denis: BM, Ms. E.1のファクシミリ版である。)
- 24) BnF VA-419 (J, 2) FT4
- 25) J. Dérens, «Le Plan de Paris par Truschet et Hoyau», p.37.
- 26) *Ibid.*, p.62.
- 27) Boutier, *op.cit.*, p.95.
- 28) Lutetia vulgari nomine Paris, urbs Galliae maxima..., 1572. (BnF GE DD 627 (81 RES))
- 29) Boutier, *op.cit.*, p.96.
- 30) A. Bonnardot, *op.cit.*, p.34.
- 31) J. Dérens, «Le Plan de Paris par Truschet et Hoyau», p.31.
- 32) 比較の分析対象は次の通り。モンマルトル下水道（「バーゼルの地図」は他の古地図と同じく下水が開いているが、「サン・ヴィクトールの地図」は暗渠である）、レ・トゥルネルとオテル・ダングレーム（「バーゼルの地図」は「ブラウンの地図」に近い）、テンプル囲い地（「バーゼルの地図」と「ブラウンの地図」には十字の形をしたブドウ畑があるが「サン・ヴィクトールの地図」にはない）、サン・ユスターシュ教会（「バーゼルの地図」と「ブラウンの地図」は似ているが「サン・ヴィクトールの地図」とは教会正面の二つの塔、側廊、教会前の集落など異なることが多い）、プチ・パレ周辺（ボートのこぎ手が「バーゼルの地図」と「ブラウンの地図」には描かれているが「サン・ヴィクトールの地図」にはない）、サン・メリー地区（集落の描き方が「バーゼルの地図」は「サン・ヴィクトールの地図」と「ブラウンの地図」に共通しているが、「サン・ヴィクトールの地図」は家の描写が画一的）、サン・ジェルマン・オークセロワ教会（「サン・ヴィクトールの地図」と「ブラウンの地図」はよく似ており、「バーゼルの地図」は単純化が目立ち、「グランド・グアッシュ」と「タベストリーの地図」では教会北側の家並みが単純化されている）、サン・ヴィクトール門（「グランド・グアッシュ」と「タベストリーの地図」は似ている）、そしてフィリップ・オーギュストの城壁の痕跡。
- 33) ジル・コロゼの以下の記述については *La Fleur des Antiquitez de la noble et triumpante ville et cité de Paris par Gilles Corrozet*, par le Bibliophile Jacob, Willen et Daffis, 1874, Préface de l'éditeur, pp.XIV-XXI による。
- 34) J. Pichon, «Mélanges Bibliographiques. La Fleur des Antiquités de Paris, par Gilles Corrozet, Paris, Pierre Sergent, 1543, in-16, lettres rondes, de 80 feuillets de 30 lignes à la page», in *Bulletin de Bibliophile*, No. 1<sup>er</sup> Janvier, septième série, Paris, 1845, pp.481.
- 35) 初版とされる1532年 Denis Janot 版は、「パリ市の歴史」と「トロイのヘクトールからフランソワ一世までのフランス国王系図」のみで構成されている。「街路リスト」が入るのは同年の Gaillot du Pré 版からで、リストは、「教会リスト」、「学寮リスト」とともに「パリ市の歴史」と「フランス国王系図」の間に入れられた。その後、1533年版、1534年版（1535年版と1539年版は確認できていない）はこの形を踏襲してほぼ同じ「街路リスト」が使われるが、後述するように1543年

版で大幅に書き換えられる。1555年には1543年版の修正版が出版されるが、これはコロゼによるものではないらしい。なお、この1555年 Nicolas Chrestien 版には、シテ島とそこに架かる橋を描いたと思われる木版画が表紙扉にある (Arsenal 8o H 13217 Rés.)。

- 36) Pichon, *op.cit.*, pp.483.
- 37) ボナルドは、コロゼの「パリ市の歴史」の前半がアウグスチヌスの『神の国』を仏訳したラウル・ド・プレール Raoul de Presle の注釈から借用されたものであるとする (A. Bonnardot, *Etudes sur Gilles Corrozet et sur deux anciens ouvrages relatifs à l'histoire de la ville de Paris*, Guiraudet et Jouaust, 1848, p.7)。更に、「街路リスト」も1532年 Gaillot du Pré 版とほぼ同じものが既に八折版10葉の小冊子『パリの通りと教会』*Des rues et Eglises de Paris*としてパリ市庁舎図書館に存在し (1871年のパリ市庁舎の火災で焼失)、これをボナルド自身が筆写して活字版に翻刻している (*Les rues & églises de Paris, vers 1500, une fête à la Bastille en 1508*, par A. Bonnardot, Léon Willem, 1876, pp.12-51)。ボナルドによると、この『パリの通りと教会』の活字は15世紀末のもので、表紙には木版画のパリの城門があったらしい (上記翻刻版に再現されている)。また、ブリュネも『十六世紀書誌』の中でこの版本を含めた4点の『パリの通りと教会』を記している (J.-Ch. Brunet, *Manuel du libraire et de l'amateur de livres*, Firmin Didot frères, 1860-1865, t.6, col.1452)。

小冊子『パリの通りと教会』は現在パリ国立図書館 BnF に少なくとも7点ある。全ての調査を終えていないが、それぞれの版本の記述では、「ノートル＝ダムの高さ」、「パリの年間消費量」の羊や仔牛、ワインなどの消費量が微妙に違って大変興味深い。1543年版『古代の華』と同じ、「ノートル＝ダムの高さ」が「66トワーズ」、1日あたりの羊の消費量「2000頭」、仔牛「1000頭」、そしてワイン「260ミュイ」と同じ数値が記載された『パリの通りと教会』版本は、今のところ RES-LK7-26878のみである。コロゼはこれを1543年版『古代の華』に使用した可能性があるが、この版本の「街路リスト」はリストのみで通りの発地と着地の記載はない。

- 38) «la chapelle des filles Dieu, ou il y a des Religieuses qui donnent aux malfaiteurs la Croix a baiser & de leau beniste pain & vin dont ilz mangent troys morceaulx quant on les meine pendre a la iustice.» (fol. lxi v) この記述も小冊子『パリの通りと教会』の「街路リスト」に既に記載されていたものであり、コロゼはそのまま流用したと考えられる。
- 39) «La rue du petit Liō Dung bout a la Rue Saint Denys, de lautre bout a la Rue des deux portes.» (fol. lxi v)
- 40) «La rue de la grande truanderie. Dung bout a la Rue Saint Denys, de lautre bout a la Rue de la contesse Dartoys. / La rue de petōnet. Dung bout a la grāde truanderie, de lautre bout devāt le pilory aux Halles.» (fol. lxi r) レ・アールに近いこの「ピロリ」pilory は「パーゼルの地図」の中にもしっかりと描かれている。
- 41) 確認できた20本の通りのうち15本は、rue de la Heaulmerie、le cloistre Sainte Opportune、rue de trouce vache、rue de la ferronnerie、rue au ferre (au fare)、rue de la coffonnerie (cochonnerie)、rue aux prescheurs、rue de la chanuoyrrierie (chanouvarerie)、rue de la grande truanderie、rue de maudetour、rue mauconseil、rue du petit Lion、rue du regnard、

rue saint saulueur、rue des deux portes で、サン・マルタン通りに繋がる5本は、rue des Lombars、rue guerin boysseau (gairin Boisiau)、rue de grenetal (garnetal)、rue aux ours、rue aubry le boucher (bri boucher) である。

- 42) 確認できなかった通りは、rue Davignon、rue de la tabletterie、rue perrin gasselin、rue des vifz、rue de la salle du compte とサン・マルタン通りに繋がる rue du petit Heurleu の6本である。「バーゼルの地図」にはこれらがあるはずの位置に通りそのものが描き込まれていないわけではない。例えば、rue Davignon はおそらくサン・ドニ通りと rue de la savonnerie を繋ぐ通りとして、また rue de la tabletterie もサン・ドニ通りから Sainte Opportune の回廊へと繋がる通りとして地図に描かれているが、これらの通りに名称は書き込まれていない。
- 43) J. Cousin, *op.cit.*, p.18. クザンはこの案内の書と地図の組み合わせの証拠としてテオドール・ツヴィンガー Theodor Zwinger の『旅行情報収集術』*Methodus apodemica* (1577年) の存在を挙げる。『旅行情報収集術』には地図を見たときしか考えられない記述があり、ツヴィンガーは1550年版『パリの古代、歴史、逸話』と「バーゼルの地図」を利用した。「バーゼルの地図」がバーゼルの図書館にあったのは、アーメルバッハ家のバジリウス Basilius Amerbach がこの地図を1558年に手に入れ、ツヴィンガーは『旅行情報収集術』の執筆のために、バジリウスから「バーゼルの地図」と『パリの古代、歴史、逸話』を借りたとクザンは推測する。事実、バーゼルの図書館が所蔵する『旅行情報収集術』にはバジリウスへの献辞が残されており、バーゼル市がアーメルバッハの蔵書を1662年に購入した中に「バーゼルの地図」があったことを考えればこの説は魅力的である。
- 44) 注37でも述べたように、小冊子『パリの通りと教会』の版本 RES-LK7-26878は、1543年版『古代の華』と親和性があるが、発地と着地が記載された「街路リスト」を持つ『パリの通りと教会』版本の存在は確認できていない。
- 45) 入市式の記述は『フランス儀典』の二つの「報告」による (*Le Cérémonial françois*, pp.756-758)。パリ市歴史図書館 BHVP 所蔵の「グランド・グアッシュ」は平手の撮影により、「バーゼルの地図」はバーゼル大学図書館が公開しているアーカイブ ([https://www.e-rara.ch/bau\\_1/doi/10.3931/e-rara-20453](https://www.e-rara.ch/bau_1/doi/10.3931/e-rara-20453)) から取った。
- 46) ここでの聖史劇は人気があって、混雑から傷害事件が起きたこともある。受難劇組合については G.-M. Leproux, *Le Théâtre à Paris au XVI<sup>e</sup> siècle*, Institut d'histoire de Paris, 2018の特に13-32頁を参照。
- 47) H. Sauval, *Histoire et Recherches des Antiquités de la Ville de Paris*, Ch. Moette, 1724, t.3, pp.596-597.
- 48) 拙論「ピエール・グランゴールによる1514年パリ入市式」、『CORRESPONDANCES (コレスポンドダンス) 北村卓・岩根久・和田章男退職記念論文集』(朝日出版社、2020年刊行予定) 所収を参照。

## La rue Saint-Denis dans les anciens plans de Paris

—La cérémonie royale d'entrée de 1517 et l'ancien

guide de Paris *La fleur des antiquitez* —

HIRATE Tomohiko

On ne dispose pas de plan de Paris avant le XVI<sup>e</sup> siècle. Selon les recherches de Derens et Dumolin, presque tous les plans de Paris du XVI<sup>e</sup> siècle qui nous sont parvenus jusqu'à maintenant, ils sont issus d'un plan primitif dressé entre 1520 et 1530 dans un atelier, sans doute parisien. Cet atelier a livré à la fois des plans de grande taille et des réductions gravées. A la première catégorie appartiennent la Grande Gouache conservée par les photographies qui représente respectueusement la ville de Paris du plan primitif et une copie (disparue), celle qui a servi de modèle à la Tapisserie vers 1570. Quant aux réductions, il y en aurait eu deux, disparues aujourd'hui. La première de ces réductions qui dépeint Paris vers 1535, a été copiée par Sébastien Münster dans *Cosmographie* en 1550 et, plus tard, par Georg Braun dans *Civitates Orbis Terrarum* en 1572. La seconde réduction représentant la capitale en 1550 a servi de modèle le plan de Bâle et le plan de Saint-Victor parachevé entre 1550 et 1552. Par suite, on peut supposer que la plus ancienne représentation de Paris est celle de la Grande Gouache qui nous est parvenue sous forme de photographies.

Cousin qui a examiné le plan de Bâle juste après sa découverte en 1874 l'a associé à l'ancien guide de Paris *La fleur des antiquitez* qui place le nom de l'auteur Gilles Corrozet comme acrostiche dans le cartouche de ce plan. L'édition de 1543 de *La fleur des antiquitez* contient une liste des rues «avec leurs aboutissants» et dénombre vingt-six rues qui connectent la rue Saint Denis. Ces vingt-six rues figurent toujours, mais sans les aboutissants, dans l'édition de 1550, date de parution du plan de Bâle. Par contre, ce dernier plan n'indique plus que vingt rues sur les vingt-six de la liste de *La fleur des antiquitez*. Si le plan de Bâle avait été conçu pour être combiné avec ce guide, la liste des rues aurait été modifiée et ajustée à la représentation du plan. On doit donc rester prudent face à l'hypothèse de Cousin.

Pour la cérémonie royale d'entrée à Paris de Claude de France en 1517, on a examiné ses sept tableaux vivants en les confrontant au plan de Bâle et à la Grande Gouache : Porte

HIRATE Tomohiko

Saint Denis, Fontaine de Ponceau, Trinité, Porte aux peintres, Saint Innocent, Grand Chatelet, et Palais. Alors que les bâtiments très importants indiqués par une banderole à leur nom dans la Grande Gouache sont agrandis et décrits plus minutieusement, la restitution des maisons le long de la rue dans le plan de Bâle est plus personnalisée que celle de la Grande Gouache laquelle semble plus uniforme. Si la Gouache conserve généralement une représentation plus ancienne de la ville, le plan de Bâle offre une restitution plus réelle des bâtiments : la fontaine de Ponceau et la salle des Confrères de la Sainte Passion de la Trinité.